
ラスト・マジック？ 15th Birthday

空路 慧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラスト・マジック ? 15th Birthday

【Nコード】

N8184Y

【作者名】

空路 慧

【あらすじ】

「十五歳の誕生日に、あなたは死ぬ」

五年前、そう言い残して姉はどこかへ消えた。

生の期限まで残り半年を切ったある日、私は失われた未来を取り戻すため、失踪した姉を捜すことになる。

しかしその謎の先には、何者かの隠れた思惑があつて――

十五歳という未来を懸けた、魔法を使えない少女の、小さくも壮大な冒険が始まる。

その日の夜、私は家で姉が仕事から帰るのを待っていた。

何でもない、いつも通りの一日だ。ただ、少しお腹がすいている。今日はシチューを作るのだったか、ならば姉の帰宅に合わせてそろそろ夕食の支度をしておこう。といっても簡単な下準備だけで、実際に料理するのは姉なのだが――などと、姉頼りな呑気なことを考えていた。

しかし、その考えが行動に移されることはなかった。ガチャガチャと玄関の鍵が開けられる音がしたのだ。いつもより少し早い帰宅だが姉だろうと思い駆け寄ると、予想通りの人物が開かれた扉から顔を見せた。

――予想だにしない、恐怖と困憊と、そして決意の表情を浮かべて。

「おかえり……って、どうしたの、お姉ちゃん？ そんなに血相変えて」

「……ごめん、もう限界が来ちゃった」

姉はそう言うのと、その場で私を肩を乱暴に掴み、床に押し倒した。柔らかなで優しい香りのする茶髪が鼻をかすめるが、それだけで心安らぐほど生温い状況ではない。

私は抵抗しようとしたが、姉の身体が出すものとは別の力が全身を押しえつけていて、少しも身動きできなかった。それでも無理矢理撥ね除のけることはできたのかもしれない。それさえ叶わなかったのは、逆説、私の動揺がそれだけ大きかったという証明だ。

「な――何するの、お姉ちゃん!？」

身体を動かす代わりに私が必死に放った言葉は、姉にかすり傷もつけることができない。むしろ気づきもしていないのかと思うほど

に、姉の意識はただ一点に集約していた。

スッと、姉の細い人差し指、その爪が私の人差し指を撫でた。その感覚の後、遅れるように走った小さな痛み。目で見えることはできなかったが、そこから血が流れていくのが分かった。

「何、を……」

怖い。その一心だけが私を支配していた。これまでずっと親しくしていた姉は、ずっと優しく接してくてくれた姉は、この時私の目の前にはいなかった。そこにいるのは、私の知らない誰かだった。

姉は肩に提げたバッグから球状の何かを取り出した。透明な緑色をした、ガラスのようなもので出来た球が姉の手に握られている。姉はそれを、疑問することすらできなくなっていた私の、血を流す小さな傷にそっと押しつけた。

「――っ」

奇妙な感覚だった。体中から力が抜けていく。代わりに気だるさが中に入ってくる。私はどうすることもできず、ただそれを感じているしかない。

やがて、球がぶるりと震えると、姉はすぐに手を引いた。バッグに紅く染まった球を収めると、苦しそうな顔と声で言う。

「やっぱり、これだけじゃ足りないか……」

姉は私の指を切ったその爪で、自分のもう片方の人差し指に線を引きいた。私と同じように、そこから赤色が滲み出し、つーっと垂れる。

私は姉が次に何をするのか悟った。その通りに、私と姉の指が触れ合う。しかし、これは本来あるべき和やかで微笑ましい光景ではない。異常と緊迫で張り詰められた、身震いさえも許されない非日常だ。

「――あ、あああああああああつ――」

世界を揺るがすような悲鳴が私の耳を劈いた。その叫びを通して、姉の感じている激痛が私に伝わってくる。だが、姉は、痛みの原因になっているであろう己の行為を止めることはない。命綱を握るよ

うに、それこそ必死になって私の指に触れ続けている。理由の分からないその行動が、私を更なる恐怖で凍らせる。

その間に、私の力は大きく奪われていた。例え全身を押さえつける力が取り払われたところで、私は身動き一つ起こす気力も無かつただろう。

一方の姉は、大量の汗を流し、荒れた呼吸を整えていた。苦しそうだ、何とかしてそれを和らげることにはできないか。襲われている身にもかかわらず、私は表情を歪める姉を気遣っていた。その気持ちが伝わったのか、余裕を取り戻した姉は、これまでで一番優しい声で私の名前を呼んだ。

「お願い、よく聞いて――」

私の、私以外の全てが失われたあの夜。姉は、溢れ出る涙を止めようともせず、しかしはつきりと、これまでで一番残酷な言葉を突き付けた。

それは、私の放った柔^{やわ}でちっちな言葉^{ナイフ}なんかよりずっと本物に近い切れ味をもって、私の心にグサリと突き刺さった。

「――五年後、十五歳の誕生日に、あなたは死ぬ」



何かに貫かれたような痛みを心に感じ、私は飛び起きた。

「夢……また、あの」

マンションの一室。ベッドから上半身を起こした私は、頬を流れる嫌な汗を拭った。濡れた手の甲を見ると、そこには炎を模した文字のようなものが刻まれている。

私以外の者には誰にも見えないその赤色は、これが刻まれた五年前は今よりずっと大きく、甲全体を覆うようだった。しかし時を経る内にどんどん小さくなっていて、今では親指の先程度の大きさしかない。

これは、私に残された生の時間を示す灯火だ。

この火が消える時、私の命は終わる——私の意志に関わらず、だ。
「後、半年も無いのか」

言いようの無い寂しさが襲ってくる。死ぬのは怖くない。もう諦めがついている（もちろん生きられるものなら生き延びたいが）。だが、死が間近に潜んでいるこの時を誰とも共に過ごせないというのが、とても寂しいのだ。

その誰かを求めるように、私はベッドから出て自分の部屋を後にした。

キッチンで淹れた紅茶を手にもリビングルームのテーブルへ。テーブルには四人分の椅子が用意されているが、使うのはただ一脚、私の分だけだ。五年前、夢で見たあの日の朝までは、姉が向かいの椅子を使っていた。残りの二脚には両親が座っていたが、二人は十年ほど前に事故で死んだと聞かされている。四人が共同生活できるだけの広さを持つこの空間も、今ではこうして私一人のものになっているのだ。

カップと受け皿の触れる高い音が、静寂の中で長く響く。その切なさが私の身体を冷やし、抗うように紅茶を飲む。取ったカップを置くと、また音が鳴る。不毛な繰り返しだ。まるで、今の自分のようだ。

必要無いと思っていたが、不意に空腹を感じたので昨日作ったシチューの余りを温め直す。食べられない味ではないし、むしろ他人にあげれば美味しいと喜ばれるほどの出来だが、どこか味気無い。^{のはず}

「皆が寄り合って食う飯は上手い」というのが祖父の口癖で、私もそう思うのだが、その祖父も両親と共に死んでいる。皆が寄り添うことは、もう未来永劫あり得ないのだ。

何かを思えば、死んだ家族に行き当たる。まだ私はいない人間に縋っていないと生きていけないのか。苛立ちにも焦りにも似た思いが迫り上がってくるのを自覚して、今度は虚しくなる。毎朝毎晩、五年前から連日のように行われる日課のような感情変化だった。

「——このまま、死ぬしかないのかな。一人で」

半年後に死ぬ呪いがかけられている、などと他人に相談できるわけもない。あの日の出来事を知っているのは、だから私と今生きているのかどうかすら分らない姉だけだ。だが、たった一人でどうすれば良いのかも分からず、ただ惰性でこれまでの日々を過ごしてきた。「呪い」をかけた犯人である姉を捜そうにも、手掛かりなど一切無い。優秀な能力を持つ姉なら、世間から身を潜めようと思えば完璧にその目的を達成できるだろう。今の私に、その隠れ家を探し当てる力は無い――五年前なら、ともかく。

自分の部屋に戻って、制服に着替える。今日は学校があるのだ。全く楽しくもない所だが、為す術の無い私にとって死ぬまでの暇潰し程度にはなっている。惰性も悪くない、ということだ。

準備を済ませた頃に、ジリリリリ、と目覚まし時計が煩わしい騒音を奏で出す。いつもより早く起きていたということに、今更になって気づいた。あの悪夢の――いや、悪夢のような現実のせいだ。忘れ去りたい過去は、それこそ命絶える瞬間まで私を縛り続ける。

今から学校に行くのは少し早い。私は家の掃除をすることにした。日課とまではいかないが、週に一度くらいでやっていることだ。自分の部屋、キッチン、リビング、トイレ、バスルーム、廊下、今では物置になった両親の部屋――そして五年前を変わらぬ姉の部屋。普段使っている場所もそうでない場所も、綺麗に整えておく。いつ姉が帰ってきてても良いように。

十五歳で死ぬ呪いをかけたのは確かに姉だったが、私は姉を恨んでいるわけではない。その時、その後数日は怨恨のような強い思いもあったが、今ではむしろ正反対の感情を持っている。落ち着いて、当時の状況を客観的に評価することができるようになったからだ――皮肉にも、あの夢を繰り返し見続けたことで。

私は姉に襲われたが、あの日の姉はまた別の脅威に襲われていた。私はそう推測している。詳しい経緯は予想もつかないが、何らかの理由で私の力を奪わなければならなかったのだろう。姉も人間だ、身の危険から逃れるためには例え妹であっても利用するだろう。そ

の点で姉を責めることはできない。普段から姉としてだけでなく、親の代わりとして、またあるいは友人として愛と優しさをもって接してくれたからこそ、私はあの日の姉の行動を許すことができた。許せないのは姉をあのような状況に陥れた者だ。出会えばその場で殺してしまいかねない程の強い憤怒を私は抱いている。もちろん、どれだけ感情を高ぶらせたところで、今の私には何もできることはないのだが。

「……あ、やばい。このままじゃ遅刻しちゃうじゃん」

考え事をしながら掃除をしている内に、随分と時間が経過してしまっていた。私は鞆を引っ掴んで、慌てて家を出ていった。

自我を殺し、「今まで通り」の仮面を被ることも忘れずに。



この世界には、「魔法」と呼ばれる不思議な力が存在する。何も無い場所に火や雷を発生させたり、触れることなく物を消したり動かしたり変化させたり、とにかく道具無しでは普通にはできないことを可能にしてしまう力——それが魔法だ。

人間は魔法を行使することができるが、ただし、万人がその能力を持っているわけではない。人口に対して一割にも満たないほどの限られた者しか持たない特殊な力だ。

その、魔法を行使できる子供達——俗に言う「魔法使いの卵」を管理、育成するために創られた機関が、私の通う場所を初めとする魔法学校だ。生徒達はここで魔法の何たるかを学び、その正しい使用方法を教わって、卒業と同時に「社会で魔法を使っても良い」という資格を得る。

私が通っているのは十年前に設立された比較的新しい学校だ。九年前からここに通っていて、魔法使いでない子供で言えば中学三年生に当たる。魔法とは関係の無い、いわゆる「一般教養」なる科目も、相応のレベルのものを習っている。自慢ではないが、これにつ

いてはそこそこの優秀な成績を収めている。逆に言えば、魔法に関する科目については、優秀とは程遠い成績になっているということなのだが。

この際だからはっきりと言ってしまおうが、私は魔法を使えない。使えなくなった、と正確にはそう表現すべきだろうか。魔法使いだらけの家系に生まれた私も当然のように魔力を持っていたが、入学四年目に迎えたあの日――「呪い」をかけられたその瞬間から、私から魔法を行使する能力は失われた。かろうじて魔力を感じることはできるが、それは一般人でも持ち得る程度の残滓ざんしでしかない。

それでも魔法学校に通い続けていられるのは、この場所でも一般教養を学ぶことができるため、他に転校する理由がないからだ。これも一種の惰性だろう。もしかすると何らかのショックで再び魔法を使えるようになるかもしれない、などと思われているのだろうか。記憶喪失でもあるまいし。

魔法が使えなくなった原因は判っている。魔力を、限界を超えて吸い取られてしまったからだ。この限界というのは、休めば回復できる最低ラインのことで、つまり私の魔力が元に戻ることはもうあり得ない。魔法学校の一年生一学期、最初の最初に習うことだが、魔力の根幹はその個人の生命力である。私は魔力を生命力ごと奪われ、今も「惰性」で命が削られている。回復できないどころか、悪化していく一方なのだ。

「おっはよー!」「おはよ」「おはよう」

教室に入ると、クラスメイト達が挨拶の言葉を掛けてくる。私は適当に応えて自分の席に着く。あの日以降、友達などという存在を煩わしく思うようになったが、「仮面」を着けた私がその感情を抱くことは許されない。多少の面倒を負うことでそれ以上の楽が得られるのだから、「仮面」を厭いとう理由はなかった。

魔法学校では、学年によって構内で自由に使用できる魔法が定められている。魔法がその種類と効果によってランク付けされていて、「この学年はこのランク以下の魔法なら使っても良い」という風に

決められるわけだ。「魔法使い」としての素質を見出された者は即座に魔法行使の制約が科せられ、しばらくは日常生活で魔法が使えなくなる（学校外では今でも使えない。卒業するまでの我慢だ）。そのため、学年を重ねある程度の魔法を使えるようになると、欲求が爆発してあれこれ術を唱える者が現れる——例えば、授業がまだ始まっていない朝の自由時間などにだ。

当然度が過ぎれば規定内でも教師達に感知され叱られてしまうため、皆そこそこに抑えてはいるものの、今も私の目前では少年少女達が魔法を使って無邪気に遊んでいる。悔しくはない。私も以前は彼ら彼女らに交じっていて、類稀なる魔力を持つ者として少なからず天狗になっていたが、仮にここで突然魔力が戻ったとしても、またその輪に入りたいとは思わないだろう。あの日から数日、治療などのため世俗から離れていたせいか、人間関係に対してかなり淡泊になってしまった。気づいてしまったのだ。この小さく幼いコミュニケーションの中で何をしたりして、それは大した意味を為さないということ。

あの日の後、学校に復帰した時、様々な感情が私にぶつかってきた。それはあるいは同情で、それはあるいは嘲りで、それはあるいは無関心だった。子供だからこそ表立つ思いは顕著で、私はしばらくの間そうした攻撃に耐えなければならなかったが、心が壊れることはなかった。姉から受けた死の宣告に較べれば、その程度、蚊に刺されるようなものだ。他人のことなどどうでも良いと思うようになったことも理由の一つだろう。またはそれ以前の問題で、私の心はあの日の特^{かんぶ}点で完膚無きまでにボロボロになっていたのかもしれないが。

やがて授業が始まった。今日学ぶのは「術式」、定型化された魔法の骨格についてだ。いつも通り退屈で、暇潰し以上になり得ない時間。もしかしたら、あの日さえ無ければ、教壇に立っていたのは姉かもしれない——そう思うが、もちろん過去を変えることなどできない。どれほど強力な魔法を使っても、過ぎた時間を巻き戻すこ

とはできないのだ。

姉が教壇に立っていたか、というのは、姉が実際にこの学校の教師をしていたからだ。十五歳近く年の離れていた姉は、私が魔法学校に入学した頃に卒業し、そのまま教員として働くことになった。昔から両親の代わりに私の世話をしていたくらいなのだから、性に合った仕事なのだろう。いや、どこで働くことになろうが、姉なら上手くやっていけたと思うが。魔法使いとしても普通の人間としても姉が優れているということ、彼女をずっと傍で見えてきた私は誰よりもよく知っている。

ただ、私の姉に対する評価に家族としての補正が入っていることを差し引いても、「姉が教壇に」云々の仮定にはそれなりの根拠がある。この授業を担当しているのは、一般的に授業を受け持つことが無いとされる学校長なのだ。失踪した姉の空席を補填できず、学校長が代役を買って出てそれが定着した——という流れを想像するのは、果たして単なる願望だろうか。

「さて、今日から新しい章『封印・結界』について学びましょう」

大神官という言葉がよく似合うような物々しい服装に身を包んだ、細身の初老の男から、澄んだよく通る声が發された。その外見から、その声から、その瞳から、学校長の名に相応しい貫禄を感じさせる。生徒と頻繁に交流することこそないものの、誰からも慕われる人物であることは確かだ。目の当たりにする機会が無いためその実力は未知数だが、学校長というはつきりとした身分がある以上、それを探るのは無粋というものだろう。

直截的な指示はないものの、生徒達は自発的に教科書を開く。学校長はその様子を見て薄い微笑みを浮かべ、自らもページに目を落としてそこに書かれた文章を読み始めた。章のあらすじのような部分だ。元々簡潔にまとめられているため分かりやすく、学校長の美麗な声色も合わさって、内容がずっと頭に入っていくのが体感できる。「百聞は一見にしかず」ということわざもあるが、聞くというのも案外疎かにはできないものである。

「——ここに書かれている通り、これから学ぶ内容は文字、記号、紋様といった『目に見える』形に落とし込まれた魔法です。封印、結界は、簡単に言えば対象を縛る『縄』を造り出す術であるため、声のようなすぐに消えてしまう媒介を用いても、通常はほとんど効果がありません。繰り返しますが、これらの術式はあくまでも『縄』であって、対象を消滅させる類のものではないのです。術が破られれば封印していたものが出てきてしまう、ということをよくよく頭に入れておきましょう」

初歩的と思われるような事項からしつかりと。

学校長の講義は続く。

「対象が力の弱い者、あるいは全く力を持たない物であるなら、もちろんその大きさにもよりますが、比較的簡単に封印を施すことができます。対象に直接術式を刻み込んでも良いですし、紙に書いてそれを貼りつけるのも良いでしょう。——では、これから皆さんに小石を渡しますので、一緒に簡単な例をやってみましょうか。見かけた方もいるでしょうが、今日の朝、私が校庭でせっせと拾っていたものです」

朗らかな笑いが起きた。良い雰囲気 of 授業だと思う一方で、しかし落ち込んだ気分にもなる。ここは魔法学校なので、当然魔力を使った実習も行われるのだが、今の私に魔法は使えない。こういう時、私は教師に呪文、術式（これら二つはあまり区別されない）が正しく施されているかを確認してもらい、代わりに魔力を注ぎ込んでもらう。教師の皆は嫌な顔もせず私を助け、「気にすることは無い」と言ってくれるが、こちらから返せるものは何も無い。私に力が無いばかりに、と申し訳無い気持ちになってしまう。

小石の封印し、それを解除するという簡単な実習を終えたところで、講義時間は半分を過ぎた。教科書を見る限り、これ以上魔法を使うことは無さそうだったので、安心して学校長の声に耳を傾ける。「——封印や結界については、単に対象を無力化、不可視化するだけでなく、実に色々な応用、活用法があります。それらは広義のも

のとして扱われ、多くの分類が為されていますが、これについてはまた後日学習しましょう」

初封印の記念としてプレゼントされた小石^{いらない}で手遊びをしながら、ノートに取ったメモと教科書を見比べる。実地試験より筆記試験に重きを置かれる私の場合、論理的な部分は他の生徒よりもしっかりと覚えていなければならない。魔法に関して完全に気力を失ってしまったって過去の数年の浪費を、ここでも何としても取り返す必要があった。実はこれも「仮面」の気持ちであるが、その下の私としても、成績不振で留年してしまうのは嫌だった。

何となく、教科書の末尾に載っていた、「封印・結界の術式によく使われる文字・記号・紋様の一覧」という図を眺める。十字だったり円だったり星型だったり、日常生活でもよく見かける形がずらりと並んでいた。こうしたものがある所では、何かしら封じられているのだろうか。それとも単純に、洗練された無駄の無い記号にこそ強い意味を込めることができるということだろうか。少し興味がある。その辺りはまた別の授業で習うはずなので、期待しておこうと思う。

小石を用いた実習で思った以上に時間が掛かってしまったのか、学校長の語りは少し早口になっていた。

「――意外に思われるかもしれませんが、封印自体に決まった方法はありません。それが対象を封印できる方法であるなら、用いる道具、術式は何でも構いません。やろうと思えば、一つの方法を覚えておけば、どんなものでも封印することができます。そうするに十分な魔力があれば、の話ですが。」

なるべく少ないエネルギーでなるべく多くの動力を生み出す。科学がそうして発展してきたように、魔法も効率化が強く求められます。封印、結界の場合においても、魔力の消費を抑えるため、対象の性質に応じた方法がいくつも考えられています。例えば、水を外に漏れないよう袋で包み込んでみるのでしょうか。皆さんが想像する通り、ビニール袋に入れば簡単にできますが、これが紙袋にな

ると水が染みて漏れ出てしまうはずです。何重にも重ねれば大丈夫かもしれないが、それはお世辞にも『効率的』とは言えません。封印の術式もこれに倣うことで、魔力の消費を大きく抑えることができます。

また、逆に言えば、術式を解析することでそこに封印されているものがどのような特質を持っているのかを推測することができます。特に、強大な存在が対象である時は、どれだけ消費量を抑えても魔力のほとんどを使用しなければなりません。それ程切り詰めているのですから、術式もより細かく丁寧なものになっているでしょう。そこから精密に封印対象の正体を暴くことも可能です。術式は対象を表し、対象は術式を表す。皆さんに掛けられている魔法行使の制限もまた、封印術式の一つです。自分を知ることによって術式を知り、上手くいけば、その封印を破ることができるかもしれませんね」

最後にそんな冗談で皆を笑わせ、学校長の講義は終わった。一礼をし、学校長が教室を出るのを見送って、生徒達がガタガタと次の授業に向けて動き始める。私もいつも通りその流れに乗って――

「――ああそうだ！」

先程学校長が閉めていったドアが再び同じ人物によって開かれた。思わぬ再登場に皆の動きが止まる。魔法が掛かったように生まれた静寂の中、学校長は一人の生徒の名を呼んだ。私の名前だ。

皆の視線を一身に受ける中、上ずった声で「はい」と答える。良かったまだいた、と安堵の溜息をついた学校長は、続けて私にこう言った。

「放課後、私の部屋に来てほしい。大切な話があるんだ」

それは、一生徒としても一人の人間としても、まるで信じられない言葉だった。確かに「魔法学校で魔法が使えない」という性質が目立つことは免れないとはいえ、問題児であるという自覚は少しも無い。あの日の直後、荒れていた少しの間を除けば、真面目に学校生活を送っているつもりだった。それが、何故学校長と直接面談す

るという大きな話になるのか――

動きを取り戻した人混みに紛れ、私は言い知れぬ不安を抱えながら流れに身を任せて歩き続けた。だが、この時持っていた憂慮は甚だ見当違いだったということを、半日後の私は思い知らされる。はなは

着実に十五歳へのカウントダウンを刻んできた時計の針が、この日、大きく狂い始めた。しかし、より死が近づいたのかそれとも遠のいたのか、それを自覚した私には全く予想もつかなかった。



放課後、私は学校長の指示に従い彼の待つ部屋へ向かった。

この学校の校舎を真上から見ると、中央が正円に膨らんだ正確な十字形になっている。正門が南塔の先端にあり、私の普段利用している教室があるのは西棟だ。学校長室は円部分に相当する中央塔の最上階にある。

ちなみに、南北東西が「棟」であって中央だけ「塔」になっている理由は、実際にこの学校を訪れてみればすぐに分かる。三階建ての「棟」に支えられてそびえ立つ二十メートルほどの尖塔は、来訪者に納得と圧倒を与えてくれるだろう。

西洋の古城、あるいは教会を思わせるこの校舎の佇まいは、通い慣れた生徒達ですら門扉を潜る度に神妙な感情を抱かせる。それでいて所要所には現代の科学技術が取り入れられており、古きと新しき、魔法と科学の混成により発揮された相乗効果は、毎日のように利用者の嘆息を誘う。この校舎そのものが入学希望であるとする者も多いし、実際に入学した者達のほとんどはこれを大きな誇りの一つとして胸を張っている。

かく言う私も、この学校の校舎は大好きだ。人間と違って、長い間変わることはなく、いつの日も静かに優しく包み込んでくれる。歴史こそ浅いが、確かな神聖さを持つこの場所は、魔法学校に相応しい不思議な力を漂わせていた。

中央塔に足を踏み入れた時、ちょうど真上から鐘の音が響いてきた。学校長室のある七階の更に上、塔の先端部に取り付けられた大きな金色の鐘が、形式上の「放課後の始まり」を告げたのだ。最後の授業が終わると、帰宅、部活動へ向けての準備を整える時間があり、この鐘が鳴るのを聞くことで次へのステップへと踏み出せる。これに関してはあまり気にしていない者も多いが、今の私にとって、質量を持った物体として肩身に重く押し掛かっているような心持ちだった。

これから学校の最高責任者と一対一で話をするのだと思うと、プレッシャーを感じないわけがない。エレベータに乗り込んだだけでも乗り物酔いをするのではないかと思うほどに緊張していた。階段で行けば、とも思ったが、七階まで上るのはかなりの重労働だろう。別段運動が得意というわけでもない私に、その選択肢はあり得ない。もう適当な理由をつけて帰ってしまったでもいいか、などと打算する思考をよそに、言うことを聞かない両足が最短距離へ目的地へと歩みを進める。

いつの間にか、金の装飾が申し訳程度に為された木製の扉が目前に立ちはだかっていた。思わず仰け反り、落ち着いて考えて恥ずかしくなって、辺りを見渡すも人ひとりおらず、ほっと安堵しては虚しくなるといふ忙しい心境の変遷を静寂に披露しつつ――私は意を決して、小さな炎の宿る手の甲を、厚い扉に二度軽く叩きつけた。

「開いているよ。入ってきなさい」

遠くから老いた男の声が応えた。いや、扉の厚みで小さく聞こえているだけか。ともかく、落ち着いた綺麗な声なので何を言っているのかは分かった。どくんどくんと暴れる鼓動を無意味にも抑えようとしながら、私はぐっと力を入れて扉を開ける。

僅かに開いた隙間から、先程よりもはっきりとした声が私を迎えた。

「――やあ、君か。よく来てくれたね」

初めて入った学校長室の第一印象は「思ったよりも狭い」だった。質素と言うか簡素というか、それこそ古びた洋館の一室のような雰囲気を持ったこの部屋は、明らかに扉の持つ「それらしさ」に負けていた。学校長が几帳面なのか書類や用具はきっちり整理整頓されているが、それでも夏には床に敷かれた薄いカーペットにカビが生えてくるのではないかと疑ってしまうほどだ。

「申し訳無いが、今少し書類を片づけていてね。もうすぐ終わるから、そのソファにでも座って待っていてくれ」

部屋に入って真正面に置かれた荘厳な机、その向こうに学校長は座っていた。授業で大勢の生徒達を前に立っている時とはまた違う優しさを持った口調に、私は戸惑いながらも「はい」と答えて右手に用意された一人用のソファに腰かけた。小さなテーブルを挟んで同じソファがもう一脚ある。学校長がこれからそこに腰を下ろすことになるのだろう。

カリカリとペンの走る音を聞きながら、私は部屋の両脇に所狭しと並ぶ大量の本を眺めていた。古くなって背表紙の文字が全く読めないほどかすれてしまったものや、授業で使った覚えのあるものなど、実に様々な種類の本がここには保存されている。学校長自身が筆を執ったと思われる書物もあった。さながら小さな魔法図書館だ。残念ながらその密集度が部屋の狭さを際立たせている、とは流石に言えないが。

ふと、少し並びが乱雑になっている部分があったので注視してみると、そこにある本は、伝説とされる幻獣や封印術について書かれた分厚いものだった。封印、結界に関しては今日の学校長が弁を取っていた授業の内容そのものズバリなのだが、伝説上の生き物についてはよく分からない。専門にしているとは思えないし、そもそも非実在が認められているものを学校長が信じているとは思えない。単に趣味で調べているだけなのだろうか。

「何か気に入った本が見つかったかな？」

左に九十度近く回していた首を正面に戻すと、向かいの席に学校

長が座っていた。いつの間にか仕事は終わっていたらしい。「すぐ」というのは適当に行った言葉ではなかったようだ。

「ここは図書館ではないが、貸し出しを禁ずるような書物も無い。私に言ってくれば、好きな本を持って行って構わないよ——もちろん、卒業するまでに返してくれることを約束してくれるなら、だがね」

授業と変わらぬ冗談に、私の顔は自然と笑っていた。このような人物だからこそ学校長を任せられたのだろうと、上手く言葉では説明できないが、私は強い得心を抱いた。

だが、どうやら穏やかなムードは早速終わりを迎えたようだった。学校長は綻ばせていた表情をきっと引き締め、私の瞳を奥をじっと見据えて、やがてこう言った。

「大切な話があると言ったね。それは、実を言うと、君のお姉さんについての話なんだ——お姉さんの所在に関する情報が、見つかったんだ」

「えっ——」

想像を遥かに超えた「大切」の言葉が持つ重要度に、私の思考は数秒の間真白に染まった。重くて学業全体的話か、できれば今日の授業の話であってほしいと願っていたが、もたらされたのは全く別方向のベクトルの情報——多くの意味を持つ混乱が、私をしばらく世界から隔離していた。

どういうことですか、というようなことを私は聞いた。上手く言葉声を声に乗せて伝えられたかどうかは分からないが、何とか通じたらしい、学校長は真剣な表情のままに、前置きをしてから「情報の詳細を教えてください」。

「落ち着いて聞いてほしい。初めに言っておくが、お姉さんが見つかったわけでも、居場所が判明したわけでもない。ただ、もしかしたらそれに繋がるかもしれない情報であるというだけだ——」

姉が消えた理由も私が力を失った原因も分からないが、この二つ

が同じ「あの日」に発生したという事実には何かしらの必然がある——学校長はそう考えているようだった。私はあの日のことを何も憶えていない（少なくとも表面上はそうなっている）が、客観的に見れば当然のように行き着く考えだろう。さして驚くようなことはない。

仮に私が本当にあの日のことを完全に忘却しているとして。この時何が起こったのか、可能性はいくつか考えられる。それは学校長が語った推測とほぼ一致していた。

まずは、私の魔力が暴走して姉は存在ごと消滅してしまった、という可能性が一つ。何らかの要因が私の中の魔力を私の断りなく使い、姉を攻撃した。強い恨みを持っていたり自己防衛が必要だった場合には、そういった現象が起こっても不思議ではないという。もちろん私が姉を恨んでいるなどということはないし、襲われはしたが殺されるようなことをされたわけでもない。何より、姉が自分のせいで死ぬなど想像したくもなかった。学校長も、これについては違うだろうと思っているようだった。

第二の仮説は、私でも姉でもない第三者が私達に危害を加えた、というものだ。これにも学校長は否定的だった。マンシヨンの防犯設備もそこまでやわではないし、若いとは言えこの学校で教師を務めていた姉がそこの暴漢に屈するわけがない。同じ魔法使いに襲われたというのが順当だが、それならいなくなっていたのは姉ではなく私だっただろう、と学校長は言った。その意味がよく分からなかった私は首を傾げたが、学校長が言うのならそうなのだろうと無理矢理納得した。

「そして最後——これが最も可能性の高いと思われる推測になるが、もしかすると、君の魔力を奪ったのはお姉さん自身なのではないだろうか」

大正解だ、と手を叩いて褒めたいくらいにドンピシャだった。

「彼女をこの学校に二度迎えた身として、私もお姉さんのことをそれなりに知っているつもりだ。だから、彼女が私欲のために妹であ

る君を傷つけるような人間ではないことも分かっている。ただ、そうした行動を取らざるを得ないやんごとなき事情があったのではないか。君の魔力を根こそぎ奪い、姿を消さなければならぬ大きな理由が」

お姉ちゃんはそんなことはしない、とでも言うべきだったのだろうが、あまりに的確に真実を突いていたので何も答えられなかった。学校長自身が姉の人格を疑っていないことも、私の欺瞞的抵抗心を削いだ。

学校長は私がショックを受けていると思ったのか、緊張入り混じる声をやや和らげて先を続ける。

「私が思うに、お姉さんは君を守りたかったのだろう。何者か――恐らくは魔術師である犯人の脅威からね。しかしどうだろう、仮にお姉さんが君の身代わりになってその脅威から逃れようとしているとして。それでも君が狙われる可能性は無くなったと、そう断言することはできるだろうか」

何故私が真犯人の狙いであることが前提に置かれているのか、相変わらず分からなかったが、冷静に考えると学校長の言う通り心配ではあると思う。魔力が無くなったとはいえ、私という存在自体は残されているのだから。ただ、こうして五年間無事でもないがで暮らせている以上、あの日以降私は誰からも狙われていないということになる。

それだけではないよ、と学校長は言った。

「自分の器の限界を超える魔力を持つことは非常に危険な行為だ。君の魔力をほぼ全て奪ってしまったお姉さんも、何とか工夫は凝らしているだろうが、それでも無事ではいられないだろう。加えて君のこともまだ心配だ。故に彼女は、ここからそう遠くには行っておらず、今でも君のことをどこかから見守っている――と、私はそう考える」

感嘆の声が漏れた。姉は今でも私との繋がりを持っている――ただの推測であっても、そう思うことは、「仮面」が外れかけていることにも気づかないほどに私を歓ばせた。

そして、その歓びはまだ終わらない。

「私も秘密裡に彼女の搜索をしていてね……つい昨日、この近辺で彼女らしき人物の目撃証言が入ったんだ。またすぐに姿をくらましたようだが、私の考えが正しいことがこれで証明された」

「そ、それってどこ——」

「——落ち着いてくれ。君がそれを聞いてその辺りを懸命に捜したとしても、お姉さんは見つからないだろう。……よろしい、では続きを話そう。お姉さんは身を隠しながらも、どこからか君を見守っている。直接その目で様子を見る、以外の方法でね。その方法として考えられるのは、やはり魔法を使ったものだ。何らかの術式が君に掛けられているかもしれない。——もう分かっただろう？ 私が今日君を呼び出した本当の目的は、それだ」

学校長の言う「それ」とは、私にその術が掛けられているか調べるとのことだろう。姉がその魔法を通して私を見ているのだとすれば、逆探知のようにして姉の居場所を突き止めることができるかもしれない。学校長は今日の授業で「術式は対象を表し、対象は術式を表す」と言っていたが、使う魔法によって術者について知ることとできるというわけか。

何にせよ、姉と再会できる道筋が見えたのだから、そこを走り抜けない道理は無い。私は魔法が使えないから、地道に愚直に突き進むしかないのだ。何を問われようとも、既に私の答えは決まっている。

「簡単な身体調査をしようと思う。是非とも協力してほしい。彼女がどこかに行ってしまったことは、君にとってだけではない、私にとって、この学校にとって——ともすれば世界にとっても、大きな損失なんだ」

大袈裟な話だと思ったが（せいぜい「働き手が減って大変」くらいだろう）、もしかしたら私の与り知らぬところで、姉は魔法社会の頂点に名を馳せるほどの存在になっていたのかもしれない。もちろん九割は冗談だし、そのような素振りを見せていた覚えも無いが、

それでも姉なら、と思わなくもない。五年前、まだまだ拙い（はずの）今より更に幼かった私にとって、姉は誰よりも強く優しく美しい存在であり、憧憬と羨望の対象だった。もしも姉が世界を救う力を秘めたヒーローで、私がそれを助けることができるのなら、それはどれほど素晴らしいことだろう。

これまでずっと、姉には頼って縋って守られ続けてきた。今度は私の番だ。学校長もついている。「大丈夫だよ」と姉に伝えて、それから皆で本当に憎むべき敵を倒そう。私はそう決意した。

「——お願いします」

自分の口から出たとは思えないほどの強い言葉に、学校長の細く乾いた唇はうっすらとした笑みに歪んだ。



数日後——西棟三階。再び学校長から呼び出しを受けた私は、約束の時間までのこの暇、誰もいない空き教室の隅っこに座り込んでいた。隅は落ち着くから好きだ。室温の問題さえ解決すれば何時間何日何年でもいられる自信がある……いや、流石に年は無いか。

なお、呼び出しの要件というのはもちろん学業のことではなく、姉に関する話の続きである。結局、学校長の調べでも姉の居場所が判明することはなかった。その辺りは説明を聞いても難しい話でよく分からなかったが、少なくともそれらしき魔法が掛けられていることは確からしい。姉が存外近くに潜んでいるという学校長の推理は正しかったということになる。

「何だか、微妙な気分だなあ……」

だが、私の気持ちは先日のように晴れてはいなかった。姉に会えるのならばそれに越したことはないもちろん嬉しいのだが、再会を果たしたところで何をすれば良いのかが分からない。気まづくなる予感しかないのだ。姉は望まずも私を傷つけ、あの日から五年近い歳月が過ぎ去っている。私がその間に変わってしまった分だけ、

あるいはそれ以上に、姉も変わってしまったている。そのはずだ。姉は今この時も私のことを見ているのかもしれないが——果たして私にはできるのだろうか。姉を、五年前と同じ「姉」として見る事が。

ころころと、制服のポケットの中で小石を弄^{もてあそ}ぶ。学校長の授業でもらった記念品だ。捨てるのを忘れていて、何となくタイミングを逃したような気がして、結局ずっとポケットの中に入れていた。小石で手遊び^{てすさ}していると落ち着く気がするのは、単に人間としての習性か、あるいは他者との繋がりをそこに感じているからか。

「期待……してもいい、のかな」

私は魔法が使えない。魔法の存在が当たり前だった世界から、あの日は転がり落ちた。舞台は変わらないのに、私の人生はがらりと一変してしまった。昼と夜の景色がまるで違って見えるかのよう。そして、今ではもう、夜の中にいるのが当たり前のように感じている。魔法が使えないというのもそこまで不便ではないと、そう思い始めている。経歴が少し普通でない「普通の人間」になっただけだし、「普通の人間」が創り出した技術は、それこそ魔法のような現象を披露しながら私の周りを踊っている——そう納得できているのだ。五年という時間はそれだけ長かった。

ただ。陽が沈み星が瞬いたのなら、またいつかは朝日を迎える時が来る。しかし、もう一生その時を迎えることはないのだと、ずっとそう諦念していたが——ここに来て状況は変わった。姉に会うことができれば、そして奪われた魔力を返してもらい「呪い」を解くことができる。私は「普通の人間」から「魔法使いの卵」に戻り、明るい世界に帰ることができるのだ。

「お姉ちゃん……」

死という壁を目の前にしてそればかりを見つめていた私は、この時初めて未練という存在に気がついた。この五年間で獲得した納得や諦観は、全てその未練から目を逸らすための言い訳に過ぎなかった。作った「仮面」は、生への渴望を視界に入れないようにするた

めのものだった。

心の中に、剥がれ落ちた表層が沈んでいく。孤独を告げるその崩壊が、深淵に封印していたはずの感情を呼び起こす。

「私、生きていたいよ……っ！」

絞り出した嗚咽は、五年振りの涙と共に、静しずかの水面に響いて消えた。

泣き止む頃には、既に陽が沈んでいた。教室どころか、校庭にも全く人氣が無い。最終下校時刻を過ぎたのだろう。そういえば鐘の音が聞こえた気がする。しかし、普通はその時間、教師による見回りがあはずだが、何故か私は見つからなかったらしい。運が良かったのか、あるいは見回り役がサボっていたのか。どちらにせよ面倒な説明を省けるのは都合が良かった。

学校長との約束では、最終下校時刻から一時間後、学校長の部屋で落ち合うことになっていた。どうして教師も帰ってしまうようなそんな時間に、と思ったが何やら「仕事がある」そうで、学校長という立場も意外と大変なんだなあと他人事のような感想を抱いた。私も素でなかなか薄情な人間である。

教室を出て、中央塔へ。少し時間があるので、エレベータは使わず階段を上ることにした。一階から七階までと較べれば、肉体的にも精神的にもずっと楽だ。百八十度の半螺旋を四度越えれば良いだけ。ゆっくり休みながら進めばそれほど疲れはしないだろう。螺旋の中心が空っぽで覗き込むと怖いため、外側の周を通っていくのも忘れない。

定刻五分前に学校長室の扉前に到着した私は、少し早くはないかなどと心配しながら、前回と同じようにノックを二回した。すると前回と同じような返答がある。違ったのは、扉を開けたのが学校長だったということだ。

「どうぞ、入ってくれ——ちょうど『準備』も終わったところだ」
準備、という言葉に奇妙な違和感を覚えながらも、案内されるま

まに私はソファに座った。学校長は座らず、「この前はつい忘れていたが、何か飲み物でもだそう」と言って、ごつい仕事机に向かった。引き出し（ここからでは見えないが）から紙製の小さな包みを二つ取り出すと、聴き慣れない謎の言語が呟かれる。ぽん、と軽い音がしたのと同時に、ほのかな香りが漂ってきた。これは紅茶の匂いだ。

「何かと言ってもこれくらいしかないが……ミルクと砂糖は？」

じゃあ両方お願いしますと答えると、既に用意していたらしいそれらをカップに入れる仕草を見せる。背中に隠れて見えないが、紅茶を淹れるところまで魔法を使ったのだから、ミルクと砂糖も魔法で調整すればいいのではないかと思う。細かい指摘は無粋だろうか。らしいが。

振り向いた学校長は二つの白いカップを浮かばせてこちらにやって来る。ミニテーブルにそれらを置くと、とすると音を立ててソファに腰を下ろした。らしくない態度だ。それほどに仕事で疲れが溜まっているのか――いや、何と言うか、これは「そわそわしている」という感じか。これから何か起きるのだろうか。まさかとは思うが……

「お姉ちゃんが、見つかったんですか!？」

耐え切れずに私は聞いた。身を乗り出しかねない勢いだと自分でも分かる。興奮を落ち着かせるべく紅茶に手を伸ばそうとしたが、膝に乗せた手が浮き上がる寸前でその動作は止められた。学校長がふるふると首を横に振っていたからだ。

「まだ見つかってはいない。だが、お姉さんが君に掛けた魔法――お姉さんに繋がるかもしれない手掛かりが手に入ったのだから、できることは色々試してみたいと思ってね。ここ数日、有効な方法が無いか探していたんだよ」

何だ、と肩を落とす。多忙の間を縫って尽力してくれた学校長に向かつてその態度は何様だと自分でも思うが、しかし落胆は隠せなかった。興奮していたのがバカみたいだ。

努力を裏切るような反応にも緒を切らず、むしろ申し訳無いと感じたように調べたいいくつかの方法を熱心に説明するその心意気はまるで聖者のようだと思ったが、学校長の言葉は私の頭に半分も入ってこない。どうせまた徒労に終わるのだろう、と根拠も無く諦めている自分がそこにいた。外と同じ陽の沈んだ世界に、私はまた閉じこもりかけている。

ただ、そうして疑心暗鬼に似た気持ちになったのも、今この時に限っては決して悪いことではなかった。場を濁そうと、今度こそ紅茶の入ったカップを手に取り、その揺蕩たゆたいに逃げ込もうとした時——「——あるいは、君の中にほんの僅かに残っている魔力をサンプルとして、同じ性質を持つものを見つけ出すという方法もある。お姉さんが使った“嫉妬シャルシー・ボルの小球”という玉を——」

「えっ？」

数瞬、周囲の全てがその時を止め、自ら発した疑問符が幾度となくモノクロの世界に反射した。

やがて世界は正常に回帰する。だがそこには、いつの間にか大きな疑念が生まれていた。ぽっかりと穴が開いたように、心に空白ができる。その隙間を埋めようと、求める言葉が口を出る。

「それって、まさか、あの緑色の……？」

——姉と私しか知らないはずのその存在を、何故学校長が知っている。

今度は学校長が硬直する番だった。苦しそうな表情が、瞬き一つにも満たない時間だが、その顔に浮かんでいたのを私は見逃さなかった。

そしてその私の様子も、学校長は見逃さなかった。静かな、しかし明らかにそれまでとは質の違う重たい視線が私を貫く。

「君は——『あの日』の記憶が、あるのか？」

それは、問いかけではなく詰問だった。今私の目の前に存在する

のは、数分前までそこにいた人物とは全く別の何か――それから発される尋常でない威圧感に私は恐怖し、気づけば全身をガタガタと震わせていた。

そうかあるのか、と答えもしていないのに学校長は納得の頷きを見せる。敵意も殺意も感じないのに、ただそこに無防備に座っているだけなのに、その頷き一つで殺されてしまうのではないかと、私は比喻でもなくそう思った。

「あ、あああ……」

考えてみれば至極簡単なことだったのだ。「親切にしてくれる優しい学校長」を味方だと思い込んでいた私は、その可能性を少しも考えていなかった。だが、ヒントは本人が既に晒しているというのに、私は全く気づけなかった。

思い出すのは数日前。学校長が「あの日」についての推理を披露した時、その答えは限り無く真実に近いものだった――まるで、彼が当事者であったかのように。

「あ、ああ、つああ、あ、ああああああ……っ！」

陶器の割れる大きな音。敷かれたカーペットに染み込む熱い液体。確かに起こったその現象は、しかし即座に己の変位を止め、何事も無かったかのような沈黙を現実に戻す。

「あ、あああ、あ、あなたが、おお、お姉ちゃん、を……」

「おや、もったいない。折角の紅茶が――」

学校長の姿をした何かが、学校長に似た声で、大して残念な風でもなく、見せつけのように自分の紅茶を啜る。私は何も答えられない。私は何も考えられない。内で広がる恐怖にただ抗えずにいるだけ。外から覆い被さってくる狂気に、ただ呑み込まれていくだけ。姉を追い詰めた恐怖が、私の力を奪った狂気が――あの日まであった幸せの全てを崩壊させた真犯人が。

こんなにも近く。

今、目の前に。

「――ほんの一口でも飲んでいれば、心地良い眠りに就いたまま安

らかな死を迎えられたろうに」

「っ———！」

跳ね上がるように私は動き出した。逃走。脅威から逃れるための全力疾走だ。この狭い部屋では二、三步で扉に触れられるはずだが、その僅かな距離が今は遠い。一步目で私のすぐ横を赤い光が横切つて、二歩目で光が扉に当たり、三歩目と同時に伸ばした手は——開くどころかびくともしない木の壁にその勢いを阻まれた。

「こっ——来ないで！」

釘を刺すようにそう叫んで、私は扉に背を向けた。学校長はソファに座ったまま余裕の笑みを浮かべている。背中に重心を寄せ、両足にこれでもかと力を込めて踏ん張りを利かせるが、やはり扉は開かない。他に出入り口も無い。完全に閉じ込められた。

窓は一つあるが、そこへ辿り着くためにはこの部屋を縦断しなければならぬ。仮に窓に触れたとしても、この扉と同じように動かせないだろう。開けたとしても、その先に広がるのは暗い空。鳥でもなく魔法も使えない私は、そのまま落下して無残な姿を晒すことになる。

「まだ行かないから安心してくれ。まだ慌てるような時間ではないからね——さて、外出の身支度を整えるとしようか」

壁と化した扉と一つになった私を嘲るかのよう^{あざけ}に、立ち上がった学校長は緩慢な動きで部屋を横切り、棚に並ぶ本の一冊を手にとった。そしてそれをすぐに元の場所——から少し離れた位置に戻す。

その行為に何の意味があるのかと思ったが、答えはすぐに分かった。ゴゴゴ……と重い音を響かせながら、本棚の一行が壁ごと扉のよう^{よう}に開いていった。隠し部屋か、とすぐに察する。中は僅かにしか見えないが、とにかく色々な物が置かれているのは分かった。人目に触れさせてはならないほどに重要な魔法具と言ったところか。

十秒程その中を物色した学校長が再び姿を見せた。本棚が元の位置に戻っていく。学校長に引つ張られ、徐々に狭くなる隙間から這い出るように出てきたのは、極端に長細い十字架——違う、あれは

剣だ。禍々しい力を鞘の内から滲ませる銀剣の柄が、その手には握られていた。

「待たせたね。それでは行くでしょうか」

「行く……って、どこに？ 何をするつもりなの？」

儀式だよ——と、学校長は抑えきれない喜びの感情を乗せてそう答えた。

「儀、式……？」

「私はこの日をずっと待っていた。君が過去の『あの日』に執着し続けてきたのと同じように、私も『この日』の到来を願いつづけていた。さあ、もうこれ以上私を待たせないでおくれ。君は大人しく——」

眠っていないさい、という言葉と共に長剣の煌めきが水平に奔った。位置の関係上、その刀身が私に届くことはないはずだったが、本能的に私はその場でしゃがみ込んでいた。

直後、乾いた、絡み付くような音を持った衝撃が私の頭上で生まれた。実体を持たない、剣から伸びる大きな力が壁を斬ったのだ。助かった、的確な判断を下した己の本能にそう感謝を告げる。

「……やはり、慣れない得物は扱うものではないね」

敵の声に、はっと我に返る。一撃を回避した程度で安堵している場合ではないのだった。学校長から目を離さないまま、私は次の攻撃を避けるべく、立ち上がるために壁同然の木扉へ手を当てようとし——

「きゃあああ！？」

——転んだ。支えがあると思っていた場所には何故か何も無く、空を切った手がその勢いで身体を運んだのだ。

危険な状況が私の勘を鋭く砥ぎ上げる。転んだのは壁——もとい開かなくなっていた扉が先程の斬撃でほとんど吹き飛んでしまっていたからで、私は今大きな逃げ道を得た。一瞬の内にそれを悟り、倒れた体勢のまま横に転がった。そこへ魔法の弾丸が突き刺さり、堅い床を抉る。

「逃げるな！」

扉は破壊されたが、元々壁だった部分は頑丈だったようで、修復が難しそうな大傷を負ってはいるものの、未だ本来の役割を果たしている。その陰に隠れたところで私は起き上がり、辺りを見渡した。敵は「逃げるな」というが、襲われている立場なのでその命令に従えるはずもない。あるいは隠れるという選択肢もあるが、この近くにそれに適した場所は無さそうだった。

とりあえずエレベータは無視する。余裕があれば乗ってしまいたいところだが、例え運良くこの階で止まっていたとしても、ドアの開閉を悠長に待っている間に捕まってしまう。やはり階段を使うしかない。

「――待ちなさい！」

待つわけがない。内側の手すりに掴まりながら最短距離を駆け下りる。だが、行きに上ってきた時とは随分と違う感覚に、私は戸惑ってしまった。魔法を掛けられたわけではない――単純に、全力で階段を上ることよりも全力で階段を下りることのほうが難しいというだけだ。慌てれば慌てるほど転倒するリスクは高いし、転倒すればその勢いのままに転がり落ちてしまう。下手をすれば死にかねない。

更に、ここが半円を描く形の階段であることも問題だった。円の中心が一種の吹き抜けのようになっていたため、上の階から階段の様子が手に入るように分かるのだ。私が六階に降りる半ばでもたもたしている内に、学校長は階段のすぐ上にまで追いついてきていた。

しかし私にはただ駆け降りるしか術が残されていない。元から抑えめだった慎重さを更に切り捨て、転倒覚悟でスピードを速める。

駆けるといふよりは、最早手すりを使って跳んでいるような状態だ。

「凍れ」フリーズ！

魔力の一塊が上方から飛んでくるのを感知したが、速すぎて回避できなかった。着地し次の跳躍に向け軸足へ力を溜めているところにその魔法がヒットし、足元に氷の牙が絡みついた。

「く、あつ……！」

履いていた靴が氷によって段に貼りつき、脱げてしまった。バランスを崩した私はそのまま階下へダイブし、六階の廊下に身体を強く打つ。声にならない鈍痛が全身に広がった。

数秒で痛みが痺れに変わり始めると、すぐに立ち上が——れなかった。足首に、今度は鋭い痛みが走ったのだ。どうやら先程の転倒で強く捻挫してしまったらしい。それくらい我慢だと自分に言い聞かせるが、上手く力が入らない。片足で逃げ切るのは流石に無理だ。このままでは——

「言っただろう、私の手を煩わせないでおくれ、と」

コツ、コツ、コツ——等間隔に鳴る軽い音が、塔の空洞の両端に向かって長く響く。そのおよそ生物的でない様子が、また一つの恐怖となって私を押し潰す。近い未来に具現化されるであろう私の死が脳裏を過ぎる。

十五歳の誕生日に設定されていた「最期の日」が繰り上げられて今日になるだけ、とは思えなかった。数日前までの自分ならばそれでも受け入れていたかもしれないが、少しでも希望を抱いてしまった今は……後悔の念が私を責める。姉のことなど、さっさと忘れてしまえば良かったのだ。学校長のことなど話も聞かずに適当にあしらっておけば良かったのだ。ただひたすらに十五歳の誕生日だけを見据えていれば良かったのだ。そうすれば、こんなに辛い気持ちになることはなかった。

見上げる天井が歪む。雫が頬を伝う。その耳元で、迎えの死神が歩みを止める。視界を遮るように現れた銀剣の胴が、私の肌色を反射する。

「君には生贄になってもらうから、ここで殺したりはしない。この剣の魔力に触れて、そのショックで少し眠ってもらうだけだ。痛みも何も無いから安心するといい」

ゆっくりと剣が降ろされる。やけに遅く感じるのは、学校長がわざとそうしているせいか、それとも死を直前にした人間の最期のあ

がきか。

救いはもう無い。やるなら早くやってほしい。そう、そうだ。もっと来い。もっと、もっと。もっとこちらへ。

そうして、銀色が私の鼻先に触れ――

「――雷^{トルデン}の矢」！」



私は白の世界を彷徨っていた。右も左も、前も後ろも、上も下も、全てが白。方向という概念すら無いかのような世界で、私はただ用も無く浮かんでいた。

何かに包まれている重みがあるような、全てから解放された軽さがあるような、曖昧な空間。だが、身体を動かそうにも力が入らない。そもそもこの世界の私に身体はあるのだろうか。この世界でない世界の私とは何だ。それ以前に、今ここにいる私は一体何なのだ。――そうして、無に等しい思考すらも世界の曖昧へ溶けていこうとしていた、その時だった。

痛み。燃えるような痛みが私を襲った。それによって私は「私」という感覚を取り戻し、己の存在と己の肉体を確認した。そして激痛の正体も判明する。

私の手の甲に刻まれた呪いの炎――比喻でなく私の命を表すその灯火が、強烈な光を放っていた。大きさは変わらない。後半年にも満たない時間を示すだけ。だが、光は、確かにメッセージを伝えようとしている。というより、何かに反応してそれに向かって叫んでいるようだった。

続けて、私は声を聞いた。どこまでも続いていそうなこの世界の、更に外から突き抜けてくるような声だ。初めは小さかったが、段々と大きくなっていくにつれ、それが女性の発するものであることが分かる。更に声は鋭い矢となって私に放たれ、同じ言葉が何度となくこだまのように繰り返されていることも知る。聞き慣れない、し

かしよく心に馴染むその声は、一つの意味を持つ言葉を紡いでいた。聞こえる言葉は、私の名前だ。誰かが、この白の世界に囚われた私を呼んでいる。行かなければ。だがどうやって。分らない。ただ、声を求めて手を差し伸べさえすれば、自然と「扉」は開くような気がする。

私はその感覚に従って、小さく強く燃える手を、そっと伸ばし――

「――っ！」

一面に広がる鮮やかな色彩が、開いた私の両眼へ一斉に入り込んできた。

太陽のような図形が大きく描かれた床。円状に取り囲む壁。そこには前方と右手に扉が一つずつあり、扉の間に二つ窓がついている。前方の扉の左側には上へ続く階段がある。外は暗い。視界に入る光景から得られた情報はその程度だが、ここが自分の通う魔法学校の中央塔だと判断するには十分だった。そう、曖昧で何も無い世界から明瞭でありふれた世界へ、私は帰ってきたのだ。

視覚の次は触覚が蘇り、自分が今横たわっていることに気づく。肩の辺りから側頭部にかけて、凹凸を持ち、しかし柔らかで温かいものが私と接している。腰から足は、逆にひんやりした感覚がある。「う……」

私を支える温かな何かの正体を確認しようと、ゆっくり体を起こす。その目的を達成する直前、すぐ後ろで大きな音が爆発し、私の全身を揺らした。

「あ――目が覚めたのね！」

音は人間の声だった。それも、白の世界で私の名を繰り返し呼び続けていたあの女性の声だ。私を呼んでいた、私の欲した彼女が、今確かにここにいる。

見なくても分かる。問わずとも分かる。あの世界に囚われた私を呼び続けてくれたのは、そして救い出してくれたのは――他でもない、

「……お姉、ちゃん」

五年前とはすっかり変わってしまった風貌をした姉は、五年前と何一つ変わらぬ優しい笑顔で、私の目覚めを迎えてくれた。

現状把握にはしばらく時間が必要だった。学校長に裏切られ、襲われ、追い詰められてしまったことさえ、私はすっかり忘れてしまっていたのだ。それでも姉はしっかりと説明してくれたので、まだ問題が解決したわけではなく戦いは続いているということを、私は何とか理解できた。

私を銀剣の力によって眠らせようとしていた学校長を、学校に乗り込んできた姉が妨害、その後続けざまの不意打ちにより、敵をしばらく動けなくすること（正確には一時的に撤退させること）に成功したらしい。その間に私を担いでここ一階まで逃げてきたが、東西南北の棟に繋がる扉を、防火用シャッターによって塞がれてしまったという。現代科学と現代魔法の融合から生まれた絶壁は、姉の力をもってしても破れなかったのだ。

どうやっても逃げることはできないと分かれば、生き残るための手段は一つしかない。敵——学校長を打ち倒すことだ。だが、その手段を実行に移すには、大きな不安要素があった。

「でもお姉ちゃん——身体、ボロボロじゃない」

見事感動の再会を果たした私達だったが、久闊きゅうかつを叙するような時間は与えられていなかった。未だ学校長に追われる身であるということもそうだが、それ以上に、姉が今にも倒れそうな様子をしていただからだ。

「大丈夫よ、これくらい……いつものことだから」

姉の答えは、その裏に抱えられた大きな疲れを少しも隠せていない。身なりはそれなりに整えているようだが、細った顔に出来た大きな隈を見ただけでもかなり弱っていることが判る。サイズが大きいめのシャツにズボン、そして分厚いスニーカーというラフな格好は、動きやすさというよりも、痩せこけたその体格を隠すためのものだ

ろう。身長は、私が伸びたといってもやはりまだ姉の方がずっと高い――が、体重はもしかすると私より低いのではないか。まともな生活を送れていないということは明らかだった。

学校長の言っていたことを思い出す。自身の器を超える魔力をもつことは危険だと。それは嘘ではないだろう。姉は今、“嫉妬シヤルシーの小球”なるあの緑色の球体で吸収しきれなかった分の私の魔力を抱えている。「器」の大きさと自身の最大魔力量が一致しているとは限らないだろうが、姉の場合はそれでも許容量を超えてしまった。喻えるならば空気を入れ過ぎた風船だ。破裂してこそいないが、そんなギリギリの状態で姉はこの五年間を過ごしてきたのだ。学校長から逃げ、私の身を守るために。私を怖がらせないように、少しも真実を告げることなく。

しかし私は学校長の罠に嵌はまってしまふ。それらしい言葉に惑わされ、ノコノコ人質となりに来た私を救うために、姉は逃げることをやめてここへ来た。私のために苦しんできた五年間は、私のせいで水の泡になったのだ。

「ごめん……ごめんね、お姉ちゃん。わた、私のせいで……」

溢れる想いに耐え切れず泣き出してしまった私を、姉はその細い腕でぎゅっと抱きしめてくれた。

「悪いのは私の方。何も言わずに酷いことをして、あなたを一人にしてしまった。辛かったでしょう、寂しかったでしょう――」

私は姉の弱った身体を抱き返す。壊れないように優しく、しかしできるだけ強く。だが、五年分の空白は、この程度では埋まらない。この程度で埋めさせたとは、絶対に言わせない。

やがて、姉の腕が私の身体から解かれた。その手は次に私の両肩を掴み、愛情に満ちた瞳を決意の色に塗り替えて、そして言った。

「――でも、もう少しだけ頑張つて。二人で学校長あいつを張り倒してやりましょう。私たちの、五年前の日常を取り戻すために」

うん、と精一杯の力を込めて私は頷いた。

「でも、どうするの？ 何だかんだ言つて、学校長はすごい魔法を

たくさん使えるんでしょ？ でも、私は魔法が使えないし、お姉ちゃんも……」

「心配ご無用よ。私が何の作戦も練らずにここに来るわけがないでしょう。ただ、あなたにも強力してもらうことになって、とても危険だけど」

「そんなの今更だよ。で、私は何をすればいいの？」

「……いい？ よく聞いて。あなたもう感づいていると思うけど、あいつはこれから、この世界を滅ぼしかねない、とんでもない『儀式』を行おうとしている。私達が負ければ、恐らくそれは成功してしまうでしょう。でも、その『儀式』を逆に利用することで、あいつを」

「……？」

言葉が突然途切れたので不審に思っていると、姉は自分の唇に人差し指を当て「しっ」と私を制した。その意味を察して上方に耳を澄ませると、幽かに足音が聞こえてくる。どこか（恐らく自分の部屋）に撤退していた学校長が、用意を整えて再び私達を追ってきたのだ。

姉を見る。どうやら接敵するまでもう声を出すつもりはないのだろう。私もそれに従うが、最も重要な「作戦」の内容をまだ聞いていない。それでも大丈夫なのか、とても不安だ。しかし学校長に声を聞かれるわけにはいかない。このままここで息を潜めているしかない。

徐々に大きくなっていく靴音は、まるで私達を焦らしているようだ。それでもじっと耐えていると、音はちょうど私達の真上に来た辺りで一度止まった。階下の様子を窺っているのだろうか。

しばらくして、ついに学校長がその姿を現した。

「やあ——そこにいたのか」

姉は抵抗するつもりが無いように見えた。学校長もそう判断し、纏っていた緊張感を少し解いた。余裕の表れか、額に手を当て苦笑いを浮かべて言う。

「先程はよくやってくれたね……いやいや、本来喜ばしいことではあるんだよ？　君もかつては私の生徒だったのだから、その成長は私にとっても嬉しいことだ。ただ、少し間が悪かったようだね」

学校長はやはり、腰脇に長剣を携えていた。だが、一度退却しているのだから何らかの魔法具を隠し持っていると思っただ方が良さだろう。その正体も知らない内に迂闊に攻め込むのは危険だ。

姉はしかし、仕掛けることもなくまた逃げることもない。ただじっとしているだけだ。

「しかし、随分と早いご到着だったね。その子が私の部屋に来た時点で動いたとしても、後半刻は掛かると踏んでいたが——いや、こうなることが読めていたということかな？　それを防ぐためにしばらく日を空けたのだが……」

学校長が私に視線を向ける。私はそれに睨みを返しながら、姉のシャツの裾を強く握る。姉の手が私のその手を握り返す。

「聞こえたのよ、この子の声が——『生きたい』って、そう叫ぶ声が」

だから私はここへ駆けつけた。姉はそう、学校長を拒絶するように言い放った。それはまた、私を恐怖から守る加護でもあった。姉はやはり、ずっと私の声を聞いていたのだ。私の近くで、しかし見えないところから、私を見守っていたのだ。

一步、また一步、学校長は階段を下りてくる。腰に組んだ両手を当て、一つひとつの段差を丁寧になぞるように、ゆっくりと。

「——突然だが、ここで授業をしてあげよう」

最後の段差を下りたところで、学校長は高らかに言った。

「もちろん、学ぶ内容はこれから私が行う『儀式』についてだ。合わせてそれに関わる歴史についても説明する。ノートを取る必要はない。最後に実演をするが、それまでは大人しく私の話を聞いていればいい」

スルオッ
消灯、と合いの手のように学校長が呟くと、フロアを照らしていた照明がふっと消えた。驚く私を、姉の両腕が抑える。大丈夫、と

耳元でそう囁く。

スクールボ

点灯、とすぐに別の呪文が唱えられる。フロアに再び明かりが戻ってきたが、照明が復活したわけではない。床に描かれた大きな紋様に合わせて並べられた藍色の火球が、夜の闇を薄く照らしているだけだ。

それぞれの火球を結ぶように、明るい青の線が引かれていく。その線は、よく目を凝らさなければ分からないが、小さな文字でびっちりと埋め尽くされていた。そうして出来上がるのは魔法陣だ。これほどの規模のものは映像でしか見たことはないが、実物をこうして間近に見ると、成程、荘厳な雰囲気の中を魔力がじわじわと広がっていくのが分かる。

先程言っていた「準備」とはこれのことだったのか。そう思っていると、「これが今回使用する魔法陣だ」という学校長の言葉が割り込んでくる。授業再開だ。

「一口に『儀式』といっても、その種類は多岐に渡る。目的も規模も、必要な道具も様々だ。ただ、一般的には『何らかの超人的力を呼び寄せ行使する、特定の環境化でしか効力を発揮しない魔術』のことを儀式と呼んでいる。私が今回執り行うものも、その例に漏れない」

途轍も無く大きな力がこの場所を呑み込もうとしている。私はそう感じた。これが、学校長の呼び寄せようとしているものなのか。

その力に呼応するように、私の中で何かが蠢いた。同時に一点の熱さを感じたので手の甲を見てみると、呪いの炎がまたしても強い輝きを放っていた。白の世界でこの刻印が求めていたものも、この場所にあるということなのだろう。

「今回の『儀式』について詳細に説明しよう。使用するものは既に揃っている。あちらこちらへ動く力の流れを制御する者——これが私、そして“こちら”と“むこう”を繋ぎ力を送り込むための通り道——この魔法陣と、それから必要とされる魔力を補うもの——すなわち君達生贄だ。これらを使って、私は……」

無風が散りばめられた藍色の炎を揺らす。

しかし、そんな些細な不可思議などどこか遠くへ軽く吹き飛ばされてしまう——それほどの衝撃が、次の言葉には秘められていた。

「私は、この地に封印された幻の神獣を召喚する！」

絶句する。呆れた、というのが最も的確な表現だろうか。大人が、それも厳格であるべき一組織の長が、夢見がちな大言壮語を嘯うそでふいている。このような状況でなければ耐え切れずに吹き出してしまっていただろう。学校長の言葉は、それくらい馬鹿げたものに思えた。

だが、それを聞く姉の表情は憤怒そのものだった。それはまた、学校長の言葉が単なる夢物語ではないことの証左でもあった。

「分かっていない生徒もいるようなので、ここで少し歴史の話をするよう。十年ほど前の話だ。ある所に、人並み外れた魔力を持ったある老魔術師いた。人格にやや難はあったが、私の尊敬する人物だった。そんな彼が、人目につかない場所で、戯れにある『儀式』を行った。それは言わば禁術——空想上の存在を現実（現実）に創り出すという、とんでもない魔法だった」

学校長はフロアの円周をなぞるように歩き始めた。

授業は続く。

「金の成る木だとか、そういったものを創造するのなら、まだ可愛いものだった。だが、その魔術師は、古の文明で語り継がれてきた『神の力を持つ魔物』を生み出すことに成功してしまった。『神獣』は人々の想像を具現化した——否、それ以上の力を有していた。ともすれば世界を滅ぼしかねない力だ。魔術師は己の過ちを悟り、誰にも気づかれぬまま『神獣』を封印することとなる」

儀式の場がきちんと整っているか丁寧に確認しながら、学校長は歩み続ける。徐々に私と姉のいる場所へ近づいてくる。だが、私達は動けない。気にしていないように見えても、敵は私達を強く警戒しているはずだからだ。少しでも怪しい動きを見せれば、すぐに腰元の魔剣の一撃が襲ってくるだろう。私達にそれを防ぐ手段は無

い。

「もちろん、術者の想定を遥かに超えるパワーを持った『それ』を封印するのは簡単なことではない。魔術師は、自身の命を生贄に捧げ、巨大で強力な結界を張った。そしてその内に『神獣』を封印した。世界は誰も感知せぬままに未曾有の危機に見舞われ、世界は誰も感知せぬままに救われていた——これが、何十万何百万とある歴史書のどれにも載っていない、小説よりも奇妙な真実だ。そして、人知れずそのような大事件を引き起こしたその魔術師の名は」

——●●●●。

学校長が口にしたその名前は。

私の祖父の名と、一字一句変わらず一致していた。

「おじい、ちゃん……？」

無意識に出たその声を、学校長は頷きをもって受け止める。

「彼はまた、誰にも知られていないが、この学校の創立者でもある……もつとも、開校した頃には既に亡き者となっていたが。だが、これで分かっただろう？ 私がどうして『誰も知らない』はずのその出来事を知っているのか——そして、私がどうして君達を欲していたのか」

学校長の興奮入り混じる声が、私の耳に入っては、脳に届くことなくどこかへ去っていく。

「君達のおじいさんが『神獣』を封印したのは、十年前のまさにこの場所だ。それでもこれだけでは足りない判断した彼は、『神獣』の存在を隠し通すため——そしてそのために張った結界さえもを隠すために、もう一つの結界を作ることにした。それがこの学校だ。実際、この学校には魔術的意味を持った記号が無数に隠されている。今この空間に見える装飾品も全てそうだし、十字を描く校舎そのものも術式の一部だ」

祖父が封印した「神獣」、祖父が設立した学校——関係無いと思っていたものが、祖父という今は亡き人物を介して私と繋がっている。

「逆説、この学校の存在そのものが『神獣』の存在を証明することになる。六年前、それを知った私は大層驚いた。今でも昨日のことのように憶えている。今でも当時の興奮が絶えることなく続いている。私は思った——『神獣』、それほどの存在をいつまでも眠らせておくのは惜しい。伝説の魔法使いが生み出した伝説の魔物を、このまま誰にも知られぬまま朽ち果てさせるわけにはいかない、と」

私の知らない間に、私にとって強い関係性を持つ者が、私の知らない人間に影響を与え、時を経てその人間は私とこうして関わっている。

学校長は私以上に「私」のことを知っている。なら、私の知る私とは何だったのか——ホントウの「私」は、一体何者なのだ。

「私は一年かけて少しずつこの学校という結界を解析し、その中を覗き込むことに成功した。だが、そこにあったのは、魔術師が命を賭してまで完成させた更に強力な結界だ。ここからが本当の闘いだった」

敵対する者達の距離は更に縮まっている。いつ戦闘が始まってもおかしくない、緊迫した状況だった。

それでも学校長は語り続ける。私達はそれを聞き続ける。

「だが、戦いを終わらせる鍵はすぐに見つかった。私は幸運だった。こんなにも近くに彼の血を引き継ぐ者がいると、一体誰が想像できただろう。いや、今思えばそれも必然だったのかもしれない。：しかし、名字が違っていたから、君達が彼の孫だとは全く気づかなかったよ——それでも、その魔力から滲み出るおじいさんの“匂い”は、どうやら強く色濃く君達に染みついていたようだがね」

特に君の場合は——と言って、学校長は私を指差した。

当然私は、怪訝な表情を返すしかない。

「ここで私は、人生で二番目に大きな衝撃を受けることになった。君のお姉さんも十分に優秀な魔法使いだが——君はそれ以上、ともすればおじいさんに比肩するほどの大きな魔力を持っていたからだ。何者かによる封印がそれを隠してはいたが、私はすぐに理解した。

君を生贄として捧げれば、彼の全魔力が費やされた結果は解除され、『神獣』を復活させることが可能になると」

私は戸惑いの眼を、救いを求めるように姉にへ向けた。姉は俯いたまま何も答えない。つまり、事実なのだ、学校長の言葉は、全て私の知る私が壊れる。「仮面」など、初めから必要無かった。これまでの私の存在そのものが虚身^{うつろみ}だったのだ。

困惑が解消されることの無いまま、ついに学校長が私達の目前に立った。講義は終わり——これから、私達の命を使った「実習」が始まる。

「さて、そろそろ頃合いかな。私達の魔力は十分にこの場と馴染んでいる。機は熟したようだ。では、早速始めるとしようか。世界を変える、禁忌の力を再誕させる『儀式』を……！」

「くっ——！」

突然、姉が私を真横に突き飛ばした。悲鳴を上げる暇さえ与えられず、私の身体は冷たい床に打ちつけられる。その直後、強い力が細い線で私の頭上に孤を描いた。学校長の持つ剣の一振りだ。

「お姉ちゃん！」

衝撃が壁と触れた烈音によそに、すぐさま姉の安否を確認する。が、そこに彼女の姿は無い。斬られたのか——と一瞬にして絶望の黒が私を支配しかけたが、それは勘違いだった。

「っ——！？」

いつの間にか背後へ回り込んでいた姉の蹴撃に、学校長の背中が大きく反った。その手から銀剣の柄が離れる。学校長は倒れながらも剣を掴み直そうとするが、

「^{オフストン}離れる”！」

姉の一声に反応して、剣が意志を持ったかのように持ち主の手を避けた。倒れた学校長が床を転がる。そのまま姉は一步踏み込み、武器を失った敵に追撃を仕掛けた。

この時姉が手にしていたのは細身の小さなナイフだった。果物ナ

イフだろうか。しかし魔法による強化がなされているのか、その刃は煌々とした紅に燃え上がっていた。

「――弾け^{レフレクテラ}」！

だが、ナイフが敵を貫くことはなく、衝撃が全て跳ね返ったかのように姉が弾き飛ばされた。太陽を描く藍色の炎が大きく揺れ、しかし消えることはない。

姉は受け身を取り即座に起き上がるが、身体がかなり堪えているらしく、膝からがくんとバランスを崩した。

「氷の刃よ、敵を捕らえよ^{フオンクフーイーン}」！
「――敵を捕らえよ^{アイスワッド}」！

学校長はその隙を見逃さなかった。姉の足元から突き出された複数の尖った氷が、小さな牢獄となって姉を閉じ込めた。あの果物ナイフで融かせないのかと思ったが、先程反射の魔法を受けた際に取り零してしまったらしい。それでも姉は必死にもがいていたが、氷の檻を突破することは叶わない。

学校長は息を切らしながらも、歪んだ笑みを氷の表面に映す。

「いやはや、上での不意打ちもそうだったが、まさかここまで戦えるとは思っていなかったよ。妹の魔力を吸って、それだけで立っているのがやつとの状態だと思っていたんだが……ああそうか、君達は姉妹だから、普通は異なる質を持つ別人の魔力でも多少扱うことができるわけか」

負うた子に教えられるというやつか、そんなことを言いながら、学校長は姉から目を離して、先程落とした剣を広げた。それから、次の標的、私のいた場所に視線をやるが――

「いない？ ……じゃない、その裏か！」

早速隠れ場所がバレてしまったが、もう遅い。私は拾った果物ナイフを、氷塊の隙間から姉に渡した。

「――ならばこうするまで！」

どうせ破られるなら自らの手で敵と共に砕く、そう考えたらしい学校長が銀剣による一閃を繰り出した。だが、氷の檻は呆気無く破壊されたものの、そこに私達はもういない。既に姉は、私を離れた

場所に置いて、学校長の後ろに回り込んでいる。

「な——っ!？」

しかし、驚愕を味わったのは姉の方だった。つい先程学校長が薙いだ剣——それがそのまま回転運動に遷移し、背後の姉を襲ったのだ。

「何度も同じ手を通じると思わないように」

姉の身体が崩れ落ちる。斬られたわけではない。回避するためにわざと力を抜いたのだ。

「剣を振り回すだけじゃ……私は止まらない!」

攻撃の先読みこそされたが、まだ姉は諦めてはいない。倒れ込みながらも、姉は渾身の足払いを仕掛けた。剣を振る動作を終えていなかった学校長は、抵抗できずにその両足を宙に浮かせた。

「——ぐうっ!」

「——うあっ!」

同時に倒れた二人だったが、立ち上がったのは姉の方が先だった。その気迫に、私は戦慄に近い感覚を覚える。元より無理を押している状態であっても、彼女は立ち上がり脅威に抗い続けている——無力な私を守るために。それが今の姉の原動力だ。

私は理解した。姉が見ているのは私の知らない「私」だけではない。今の自分も含めて、姉は私を守ってくれている。再会の瞬間のあの抱擁が、その何よりの証ではないか。私は姉の妹である——その事実さえあれば、少なくとも姉の前では、私はホントウの私でいられるのだ。それだけ分かっていれば、私は十分だ。

困惑は消えた。弱い心はもう私の中には無い。力は無いが、私は姉のために戦うことができた。私も姉を守れるのだ。二人が助け合い守り合えば、どんな脅威も退けることができる——

——と、思っていた。

打ち所が悪く気絶したのかずっと床に伏していた学校長に、姉が

止めを刺そうとした、その時。大きな破裂音が、中央塔全体に響き渡った。

姉の動きがしばらく止まる。時間が停止したようだった。やがて、消え入るような姉のかすれた声が、静かな空間に虚しく霧散した。

「な、んだ……？」

どさり——と、姉は背中から倒れ込んだ。そしてそのまま動かなくなつた。いくら待っても立ち上がる気配が無い。

「——ふう、危ないところだった」

「あ、あ、ああ……っ」

ゆらり、と学校長が立ち上がる。

絶望がもたらす空白に押し潰されていく私が見たのは、その手に握られた細くて黒くて無骨な形をした筒——拳銃だった。

「やはり、魔法使い同士の闘いで虚を突くならば、こういうったものを使うのが一番いい。魔力を察知できないから、全く気づけなかっただろう？　魔法に頼ってばかりいるとこういう結果になる、ということを最後に君はその身をもって学ぶことができたわけだ」

胸元に拳銃を収めた学校長は、そっと姉の身体を抱え上げて、フロアを中心まで運んでいった。姉のシャツの脇腹辺りには、濃い血の赤が広がっている。溢れ出る血が止まることはなく、横たえられた後も床の模様にまで侵食していった。

学校長が、今度はすっかりへたり込んでしまった私を見る。

「——次は君の番だ。お姉さんのように痛い目に遭いたくなければ、大人しく眠っておくことをオススメするよ」

近づいてきて、ずっと手が差し伸べられる。

私はきつと睨み返すが、敵は怯みもしない。

「さあ、ほら、この手を取ってごらん」

「……………誰が」

「うん？」

「誰があんたなんかに——！」

過ぎた恐怖が私を突き動かした。差し出された手を思い切り払い、

それによってがら空きになった懷に、私は全力でタックルした。

「この……まだ足掻くのか！」

だが、火事場の馬鹿力も、敵を一步後退させる程度のものでしかなかった。腹に頭を突っ込んだ状態の私の肩を学校長はがっしりと掴み、老人とは思えないほどの力で私を後方に投げ飛ばした。

「痛っ……！」

床に落ちた私は藍色に燃えるカーペットの上を転がり、姉から一メートルと離れていない場所で止まる。最後の抵抗も虚しく失敗に終わった私は、手を伸ばせば届きそうなところにある姉の顔に、しかし触れる気力も失っていた。ただぼーっと、姉の腹からどくどくと流れ出る血を眺める。もう少してその血溜まりは私に触れそうだと私と姉の間にある赤を、安堵の混じった声が揺らす。

「ああ、やつと大人しくなってくれたか。これで改めて『儀式』を執り行うことができる……とはいっても、君達はもう聞いていないか。世紀の瞬間に立ち会えるというのに、実にもったいないことだ」
動かなくなった私を、どうやら気絶したものだと思ったらしい。
学校長は私達のいる中心から離れていった。今ならもう少し抵抗することもできるが――いや、したところで、もう状況は覆せないだろう。もういいや疲れた寝たい、という投げやりな気持ちだが、私の瞼を閉じさせる。

そして、とうとう『儀式』は始まった。学校長の長々とした詠唱が始まると、場の空気が徐々に震えだした。呼び出そうとする『神獣』の力に怯えているのだろうか。

震えているのは空気だけではなかった。いよいよ死と直面するまでに至った現実を心底から理解した私の身体も、ぶるぶると震え始めていた。

「――……て。……がい、私の、声を、聞いて」

小さな声が耳をくすぐり、私は目を開けた。そこには、腹を撃たれて瀕死の状態にあるはずの姉が、必死の形相で私を呼ぶ姿があった。

「お、お姉……」

「しっ……そのまま、動かずに、聞いて……ちょう、だい」

頷く——こともせず、私は瞬きでそれに応える。ただ、姉もやはり限界のようで、息も絶え絶えだ。何度も意識を失いそうになっているが見ているだけでも分かる。

「や……っぱり、あなた、の力……を、借り……」

「私の力？」

ここは「無理をして喋るな」とでも言うべきなのだろうが、姉の言葉を聞きとらねばならないと、私は続きを促す。

「作、せ、んは……わた……の、血……」

しかし現実とは無情なもので、ここで姉が力尽きてしまった。まだ何とか息はあるようだが、このままでは回復することなく死んでしまうだろう。

とはいえ姉はまだ諦めていないようだった。「作戦」を私に託したということは、まだ学校長を止める手段があるということだ。だが、姉はその内容を伝えきれなかった。「血」と言っていたような気がするが、それだけでは流石に何も推測できない。

「……ダメだ、解らないよ、お姉ちゃん」

これが最期なのか——姉が繋いだ希望を掴み切れなかった悔しさに、涙が滲む。

私は圧倒的なまでに無力だ。それを自覚していたから、この五年間、私は「仮面」を着けて逃げ回ってきた。その中で得られたものは何も無い。むしろ弱くなっていたのだろう。ずっと苦しみや恐怖と闘い続け、消耗しきった姉よりも、私は弱くなっていた。生きたように死んでいたのだ。

それでも良いのだと、ついこの間まで私は思っていた。だが、今は違う。生きたい。生き延びたい。ここから脱出して、姉と主に平和に暮らしたい。そうした願望が今にを口を突いて出そうなほど溢れている——だが、私がそれを叶えることはできない。

どうして私には、こんなに力が無いのだろう。

どうして私は、魔法が使えないのだろう――

「――っ！」

その閃きは、突然私の暗い世界を照らし出した。

私は興奮を抑え、学校長に悟られないよう、ゆっくりと身体を姉の方に近づける。十分近づいたと判断すると、今度は手を姉の腰へと伸ばし、ベルトに挟まれていた果物ナイフをそっと引き抜いた。私は「今」魔力を持っていないため、刃が熱を持つことはない。

学校長の詠唱はまだ続いている。これだけ大きな事を為そうとしているのだ、どれほど下準備を整えたところで、自身の負担がゼロになることはないのだろう。私は安心して、ナイフで自分の指を切った。

とろり、と赤い液体が流れる。量こそ違うが、姉のそれと同じ色だ。手の甲に刻まれた小さな炎が、これまでにないほどの光を放つ。それを合図にして、私は赤く染まった指を、姉の腹から出た血溜まりに突っ込み――

『――あ、あああああああああつ！！』

声にならない悲鳴が私の耳を劈いた。^{つんざ}あの日とは違い、その悲鳴の主は自分だ。だが私は、そんなことも分からなくなるほどの力の^{ほんりゅう}奔流に呑み込まれていた。

……何秒、何分経ったか。それは前触れも見せず、ふっと止まった。

しかし、意識の戻った私に何かを疑問する猶予は与えられない。学校長の詠唱が、今まさに終わろうとしているところだったからだ。だが、混乱に近い思考の中、ただ一つだけ――これから何をすべきかだけは、私はよく知っていた。

「――彼の世より降誕せし『獣神』よ、己を祝す^{にえ}贄を喰らい、今ここにその力を解き放て！ 現れよ、“コクあ”

詠唱は終わった。

ただ、完遂したのではない。術者がこれ以上、声を上げることが

できなくなったのだ――

「ぐ……う、かはっ……!?!?」

――その胸に、小さな穴を穿て^{うが}られて。

学校長が倒れたのを確認した私は、真っ先に姉の傍に屈み込んだ。私の身体に還ってきた魔力を使い、治癒の魔法を掛けるためだ。学校で習ったものの見様見真似だったが、何とか上手くいったらしく、傷口を塞ぐことはできた。それでも大量出血したことに変わりはないので、回復まではもう少ししばらく時間がかかるだろう。

姉を背負い、次に学校長の許へ。姉と違い胸を撃たれているので、致命傷になっているはずだ。私に治癒魔法を使うつもりがないため、この老人の命運は既に決まったと言える。彼は苦悶の表情を大量の脂汗で濡らし、虚ろな瞳で私に問い掛けた。

「いっ……たい、何を、した……。魔法、なら……。気づく、はず、だ」

「これだよ」

私は魔法を使って、学校長を撃ち抜いた「これ」を回収し、それを手のひらに乗せて見せた。そこにあった、小さな白い塊は。

「小、石……?」

「容量は拳銃と同じ。発火の部分だけ魔法を使ったけど、小石自体には魔力は少しも込められてない――小石もこのやり方も、全部『先生』からもらったものだよ?」

「っ、う……あ……――」

何かを言おうとして、結局何も言えず、学校長の全身から力が失われた。しかし、気絶しただけのようだ。死んでもおかしくない傷なのに、随分としぶとい――いや、治癒能力を引き上げる魔法があらかじめ掛けられていたのか。

私は姉を降ろし、代わりに学校長を持ち上げた（触れたくもないので魔法で浮かせている）。姉の血が残るフロアを中心にその身体を落とし、私は姉の方へ戻った。こうして術者と生贄の立場が逆転

したわけだが、儀式的には何の問題も無い。むしろ生贄の持つ魔力が足りないことにより、『儀式』は失敗に終わってしまうだろう。

「——これでいいんだよね、お姉ちゃん」

そして私は、学校長に代わって、静かな声で詠唱の締めを括った。

「……終わったのね」

人間が床に呑み込まれるという呆気無くも凄惨な光景を見届けたところで、後ろから姉の声が聞こえた。

「あ、起きた！ お姉ちゃん、具合はどう？」

「ええ、何だか貧血気味だけど……そっか、あなたが治してくれたのか」

「うん、そうだよ！ ——ねえお姉ちゃん、私、上手くできたよね？」

上出来よ、と上半身を起こした姉は笑う。疲れは見えるが、この調子ならもう大丈夫だろう。

儀式を妖しく彩っていた藍色の炎が消え、辺りは完全な闇に覆われた。これでは不便なので、私は姉に教えてもらった呪文を唱えて照明をつける。ふう、と長い溜息をつき、姉は続けて言った。

「疲れちゃったけど……ずっとここに居るわけにもいかないし、もう少し頑張りましょうか。家に帰るまでが遠足だって言うしね」

「遠足って言うほど和やかなもんじゃないけどね、これ……でも、ここに居るとまずいのは確かか。私はまだ動けるし、さっさとここから、脱出、し、て——」

「——え？」

ドン、と下から突き上げられるような衝撃が襲ってきた。地震か、と思ったがそうではない。もしそうなら、これほどにまで重い魔力を感じるなどあり得ない。故に考えられる可能性は、ただ一つ。「『神獣』が、復活する……『儀式』が成功してしまったってこと！？」

肯定が、更に強い衝撃となって帰ってくる。床には罅^{ひび}が入り始め

た。その様子をただおろおろと眺めているしかなかった私達だったが、

「――」

突然、姉ではない誰かの声が聞こえたような気がして、私の動きは止まった。

「ちょ、ちよつと、どうしたの!？」

「……分かった」

「は？」

「私が、もう一回『神獣』を封印すればいいんだ……!」

姉の呆氣にとられた表情を見て、私は笑ってしまった。こんな状況だというのに、何を呑気にしているのだろう。だが、それでも私は、絶対に大丈夫だという確信を、何の根拠も無く抱いていた。

バカじゃないの、と姉は叱るように言う。

「おじいちゃんだって、自分の命を対価にしなきゃ封印できなかったような奴なのよ!？ そんなことしたら今度はあなたが――」

「――大丈夫だよ、お姉ちゃん」

「なっ……どうして、そんなことが」

「だから、大丈夫だって、そう言ってる気がするんだよ――おじいちゃんが、私にそう言ってくれてる気がする」

二の句も告げない姉をよそに、私は空間の中央まで駆けた。大きくなっていく揺れも気にせず、私は自分の中に残る魔力のほぼ全てを胸の辺りに集めていく。今まで感じたことのない、世界が一点に収斂^{しゅうれん}していくような大きな力が私の中を踊る。

途中、私の身体からふわふわとした光のベールが現れ、何かを伝えるように私の周りを一回転すると、一本の細い棒へと形を変えて罅^{ひび}割れの隙間に突き刺さった。私はその棒の先端を両手で深く握り、心地良い温もりを感じながら、頭に浮かんだ言葉達を紡ぐ。

「――『決して禊^{みそ}がれぬ我が罪の証として、この地に眠り続けたまえ』!」

誰に知られることもない歴史の中で、誰に知られることもなく。

私と姉だけしかない、この小さくも純粋な世界に。
孤独でも絶望でもない、平穏という名の静寂が訪れた。



私達は幸せを取り戻した。

それは、世界にとっては取るに足らない程度の変化でしかなかったが、私にとっては二度目の人生の転換点だ。いなくなった学校長の座には福学校長だった人物が就き、姉も教師として魔法学校に復帰（資格再取得など面倒はあったようだが）し——そして私も、五年前のように魔法が使えるようになった。それも、確かに、五年前以上の強い力をもって。

やがて、帰ってきた日常にようやく慣れてきた頃、私は十五歳の誕生日を迎えた。もちろん死ぬようなことはなかった。未来を手に入れた私はこの日の夜、姉に、私の持つ秘密について聞かされた。「あなたは本来、とてつもなく強い魔力を持っている。それこそ、『幻の神獣』を創り出し、それを封印したおじいちゃんに並ぶほどのね。おじいちゃんはその魔力をあなたが持て余すと思って、強い封印を施した。命の危険に晒された時には解除されるようになっていたけど——今も見えるでしょう？ その手の甲に描かれた炎が」確かに、私が「呪い」だと思っていたその刻印は、今も消えていない。半年前は一回り大きなテントウムシ程度だったのに、今はまた「あの日」以前のように甲全体に広がっている。

「その炎は、あなたがどれだけ死に近づいているかを示すもの。あなたを除く家族にだけ見えるようになっていたけど、あの日、私があなたにも見えるよう術式を書き換えておいたのよ」

成程、つまり炎の刻印自体はずっと昔からあったというわけか。単なるメーターでしかない刻印とは違い、祖父の施した封印に結界修復の効果が付加されていたことは、姉も全く知らなかったようだが。

「ただ、あの日、私があなたの魔力をほとんど吸い取ってしまったせいで、おじいちゃんの封印はあなたの生命力を強く締めつけるようになった。あなたが死ぬと言ったのは、そういうことなのよ。ま、『十五歳の誕生日』というのは割と適当なんだけど」

「適当だったんかい！」

しかし、その辺りで本当に「炎」が消えそうだったのは確かである。ここは大体の見積もりができた姉を褒め称えるべきなのかもしれない。

「まあ、私も甘かったとは思うわ。あなたの魔力を奪う考えはあったけど、私の容量を考えるとそんなことはできそうになかった。そこであいつが“嫉妬シヤルシー・ボルの小球”のことをぼそと漏らして、これならいけるんじゃないかと思っちゃったのよね。もちろんそれも罠だったんだけど、私は気づかずに、あいつの隠し部屋から“球”を盗み出した。それもまた罠だったのかどうかは分からないけど、これがまた微妙な品物でねえ……あんたの魔力を半分少し吸ったところで満タンになっちゃってさ、残りは私が頑張って自分の身体に溜め込む破目になったのよ。自分の魔力を仮想的な『器』として構成して、一時的に最大魔力量を増やすことでね。その場しのぎではあったけど、五年間もったんだし、やっぱり私もおじいちゃんの孫ってわけよねー」

最後は微妙に自画自賛になっていた。私と違ってとんだお調子者である。この辺りは五年前と何一つ変わっていない。

変わったと言えば、私が料理をするようになったということだろうか。ここ半年ほど「あなたの料理が食べたい」と言って聞かなかった（五年前までの意趣返しか）姉に抗うことができず、私は色々な料理を作ることになった。一人暮らしで適当にやっていた分、ちゃんとしたものを作り慣れていないということを思い知らされる半年間だった。

ただし今日は私の誕生日ということで、久々に姉がシチューを作ってくれた。「久々で腕が鈍ってるわー」などと言っていたが、私

の作るものより数倍もおいしく感じられた。

「あなたはおじいちゃんのことをよく覚えていないだろうけど、別に悪い人だったわけじゃない。あなたの魔力を抑えていたのもその身を案じてのことだし、至る所で『世界一の魔法使い』を自称して回るとか多少ハチャメチャなところはあったけど、すごく家族思いだった。私を五年間信じてくれたあなたみたいだね」

家族思いと言うなら姉の方だろうと思うが、やはり今でも私を傷つけたことを引け目に感じているのだろう、それが分かるから掛ける言葉が見つからない。

「あいつが言っていたように、おじいちゃんは確かに大きな過ちを犯した。人間としての理を外れ、あんなもの神獣を創り出して、その代償として私達のお父さんとお母さんを失った。取り返しのつかないことをしてしまったおじいちゃんは、少しでも罪を償おうと、その身を捧げて自分が生み出した罪を封印した。墓標として、結界として、そして私やあなたへの最後のプレゼントとして――あの魔法学校を、この地に遺してね」

姉の言う通り、祖父や両親のことはほとんど記憶にない。辛うじて顔や声を思い出すことはできるが、これといって憶えているエピソードは無い。だから姉の話を知りても大して感じることはない――と思っていたのだが、私は知らず知らずの内に涙を流していた。私達は家族だ。祖父らの血は受け継がれ、今、私の一部としての身体の中を巡っている。それは、誰しもが持っているだが、記憶よりも伝聞よりも確かで、遥かに強力な魔法。例えばこの先、私が彼らのことを完全に忘却してしまったとしても、その魔法の効力が失われることはない。そしていつかは、私もまた、誰かの一部として溶け出していくのだろう。

「――お姉ちゃん」

「ん、どうしたの？」

「やっぱり私、ずっと生きていたい」

突然の言葉に一瞬きよとした姉だが、やがて笑っていった。

「そんなこと、全然心配しないでいいのよ——あなたが死にそうになったら、いつでもどこでも何度でも、私“達”が飛んでいつてあげるから」

「……もう、いつまで経っても子ども扱いしないでよ」

「あなたが私より年上になったら考えてあげなくもない」

「そんなの一生無理じゃん」

「だから無理すんなってことよ」

「屁理屈だよ」

「屁理屈でいいんだよ」

「……………」

「……………」

「ぷっ——あは、あははっ」

「——あははははっ！」

過去を連れ、今を紡ぎ、未来を繋ぐため。

私は、私達は、生きていく。

これまでも、そして、これからも。

最後の魔法は——まだ、終わらない。

(後書き)

<あとがき>

読了ありがとうございます、作者のCaladiこと空路慧です。
今回の短編は「ミニチュアライド現代魔法学園ファンタジー」、
4万字にぎゅっと圧縮された冒険譚をお楽しみいただけたでしょう
か。

……量の割に内容が薄いだなんて言わないで(泣)
ええ、分かっていますとも、分かっていますともさ……

自虐はこれほどにしておいて。

十五歳の誕生日が命日と定められた少女がその運命を克服するとい
う、まあ割とよくある(?)お話です。

別側面から見れば、死を乗り越えることで「仮面」を殺し、主人公
は新たに生まれ変わったと言えるかもしれませんが。

私たちも、これほど極端ではないですが、色々な生と死を繰り返し
ています。

それを通して成長している自分を見つめ直すというのも、たまには
良いのではないでしょうか。

そうすることでのいつの間にか掛けられていた「封印」を暴き、破る
ことができるかもしれませんね。

ではでは、今日のあなたへ小さな魔法が届きますように。

※ 後書きの後書き ※

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/54352/blogkey/305329/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8184y/>

ラスト・マジック？ 15th Birthday

2011年11月24日10時47分発行